

英雄。ポロネーズが  
奏でる絆の秘話

立  
処  
真

青山ライフ出版

「英雄ポロネーズが奏<sup>かな</sup>でる

「絆<sup>きずな</sup>の秘話」

立<sup>りっしよ</sup>処

真<sup>まこと</sup>

## 目次

序章	主よ、いずこに？	3
第一章	恩賜の銀時計 <small>おんし</small>	8
第二章	骨肉の絆	24
第三章	見えない大きな力	48
第四章	世紀の告発	87
第五章	ナポレオン金貨	145
第六章	欲望の仮面	171
終章	心を伝えて	199

序章 主よ、いずこに？

序章

主よ、いずこに？

【巨星墜つ】

二〇〇五年四月二日(土)に、第二百六十四代ロマ法王ヨハネ・パウロ二世が、八十四歳でこの世を去った。このとき、信者であるかないかを問わず、世界中の救え切れぬほどの人々の心を一様に過ぎつたのが巨星墜つおとの四文字で、彼らの惜別の情をよく言い当ててゐる。

巨星と呼ぶにふさわしい偉大な存在の訃報に接し、名だたるカソリック国である東欧のポーランドは、国全体がとりわけ深い悲しみに包まれたという。それもこの法王が、本名キヤロル・ウオイトウアというポーランド人だったと聞けば、なるほどと頷ける。

一五二四年以来綿々と続いた「法王はイタリア人」という伝統を破つて選ばれた非イタリア人の法王として、また初のスラブ系法王として、当初から衆目を集めてきたヨハネ・パウロ二世。この異色の法王は在位二十六年の長きを教える間に、大方の期待に違たがうことなく、世界三大法王の一人と目されるほどの顕著な功績を残している。

\*

第二次世界大戦でのナチス占領下の祖国ポーランドで、反ナチ活動の拠点と見なされて非合法化され、地下にもぐった神学校。その生徒の一人に名を連ねた若き日のキリストの僕しもキヤロルは、迫害された人々の救済に一命を賭して走り回ったという。

そして後年、法王に就任して再び祖国を訪れる機会を得た彼は、旧ソ連の圧政下で共産主義の嵐に翻弄あそされ喘いでいた同胞を、「恐れるな」と心から激励した。それに勢い

を得た人々の尊い犠牲で、ポーランドは共産主義と敢然と決別したヨーロッパで一番早い国として、歴史にその勇名を刻んでいる。

またこの不世出の法王は、歴代の法王の中で最も頻繁に海外に足を運んで救いを求める者に親しく接し、自ら福音を伝えて回っている。その訪問国は百三十二カ国を数えるといわれ、行き先々で対話と和解を掲げて、暴力、戦争、独裁、抑圧の悲劇を嘆き、平和と人権の尊さを訴えて止まなかったそうだ。

宗教間の対立緩和に最も腐心したのも、この人だった。そしてかつて自分に凶弾を浴びせた暗殺者を獄中に訪れ、その罪を許したとも伝えられている。

こういう数々の高邁なエピソードからは、彼の生涯を貫いた揺るがぬ信仰と、身を挺しての献身振りが透けて見える。

晩年は難病のパーキンソン病の進行に苦しんだのが知られているが、死の直前まで法王としての崇高な務めを全うしようと、ひたすら奮励する痛々しい姿が見る者の心を打つたことは記憶に新しい。

だからポーランド人の誰もが、国を愛すと同じ、あるいはそれ以上に愛し敬ったこの法王は、紛れもなく現代ポーランドの誇りであり希望の星なのだ。

\*

そして訃報がもたらされたときのこと。彼の名をとってポーランド語でヤナ・パウウワ（ヨハネ・パウロ）二世通りと名付けられていた、ワルシャワ市中央部を南北に貫く幹線道

路三・五キロには、恐らく五万個は優に越える色とりどりのランターンが、全国各地から集まった人々の手で置かれた。ランターンは歩道はおろか、市電の線路脇に至るまで所狭しと並べられた。

ランターンの中の火を点されたローソクは、それから数週間にわたって昼夜を問わずこのこうと照り輝き、法王の死を悼み安らかな昇天を祈る人々のひたむきな思いを、見る者に切々と伝え続けた。

葬儀は約一週間後にバチカンで営まれ、世界中から三百万人余の敬虔な信徒が参列したというが、うち五十万人ほどがポーランドの一般庶民といえる老若男女だったそうだ。

豊かとはいえない彼らは空路を避け、バスや列車を乗り継いで、または車を連ねて陸路をなん日もかけて馳せ参じている。ある者は宿泊施設が満杯のためローマ市が無償提供したテントに寝泊りし、またある者は車中泊をしたそうだが、それを苦にして不平を言う者はいなかったという。

\* \* \*

カンリック教とポーランドということ忘れてはならないのが、一九〇五年にノーベル文学賞の栄光に輝いたあの話題作「クオ・ヴァデイス(ドミネ)(主よ、いざこに)」の著者、リック・シエンケヴィッチで、この人もこの国が生んだ巨星の一人だった。

彼はこの本の中で、ローマ帝国の悪名高き暴君ネロによる残忍非道なキリスト教徒迫

害の史実を取り上げ、いつの世にも変わらぬ迷える魂の悲壮な問いを我々に投げかけた。

迫りくる死の恐怖に震え、神の奇跡を求める無抵抗の囚われの信者たち。その必死の祈りも空しく、闘技場に引き出され、なす術もなく次々と猛獣の牙と爪の餌食となつて倒れていく殉教者。歓声を上げて見守る異教徒の大観衆。

（神よ、あなたはどこにおられるのか、救いを求める我々の悲痛な願いはなぜ届かないのだろうか？）という魂の奥底からの問いを、著者は迫真の描写で浮き彫りにした。

遠藤周作もその名著「沈黙」で真つ向から取り組んだ、神と人との究極の関わりに迫る深遠な主題だ。

\*

建国の柱として、また人々の魂の支えとして、常にカソリック教とともに歩んできた国ポーランド。目を奪われるほど豪華で荘厳な、驚くほど多くの教会が、信者の浄財で建設、維持されて活発に活動している。この地では、（主よ、いざこに？）という問いは、いつも彼らの心をつかんで離さない、生きる意味の探求と不可分の不朽のテーマなのだろう。

このポーランドでかつて起きた、ある日本人とその一人息子にまつわる不滅の絆の秘話は、この地ならではの精神的風土の産物といえよう。



第一章

恩賜の銀時計

おんし

一

楽聖ショパンを生んだ国（父親はフランス人）として記憶され、さらにバレエ、オペラ、クラシック音楽などの芸術の国としても名高いポーランドには、本場での切磋琢磨せつさくたくまにいそむ前途有望な日本人音楽留学生が、常時十人は越えるようだ。

その一人で、日本を離れてポーランドに居を定めて以来、かれこれ一年半になるピアニスト留学生宗像千鶴むなかちづるは、いつものようにヤナ・バウウア二世通り三十二番地に足を向けた。買い物のついでに、そこで毎朝のように開かれる“ノミの市”を時たまぶらつくのが、このところの彼女の気晴らしの一つになっている。

ワルシャワ市民の食卓を遠く昔から支えてきたという有数の生鮮食品、パザール“ハラ・ミロフスカ”に隣接するという場所柄だからなのだろう、ここでは衣類を含む日用品のがらくたを主に扱う古物市が、以前から開かれていた。

風呂敷のようなものを歩道に広げて品物を並べた売り手が三十人から四十人ぐらい、横一列になつて日がな一日、僅かな利ざやを求めて買い手を待っている。ほとんどの売り手が質素な身なりの年配の男女で、顔触れは大体一定しているところを見ると、これで